

京都・嵯峨水尾のアサギマダラ 2011  
BV アサギマダラの会 金田 忍



水尾は、京都市街の北西に聳える愛宕山(924m)の裏側にあり、柚子の里として知られる戸数 34 戸の小さな集落である。愛宕山西面を集水域とする水尾川を見下ろして階段状に田畑や民家が散在し、田十町歩、畑十町歩も耕作される裕福な集落であるが、今では休耕田が目立ち、子供が一人もいなくなって小学校が休校になってからでもかれこれ十年になり、市も過疎化と高齢化対策に頭を痛めているようだ。

町おこしの一端として、休耕田を使って花を植えようという『水尾・花いっぱいプロジェクト』が発足し、田んぼ 2 枚にフジバカマを植えたところ見事に開花した。背景は谷を隔てた向こうの尾根の緑の森であり、コンパニオン役のアサギマダラや数種の蝶、トンボなどが飛び交う景観は観光客のみならず、地元の人々にも称賛された。

北から南へ流れて保津川(淀川・桂川の上流)に注ぐ水尾川流域は、殆どの山腹を針葉樹が占めており、集落や田畑、柚子畑などは渾然一体となって、いわゆる豊かな里山環境を構成している。しかし愛宕山の山林は人工林が多く、これまでの調査ではアサギマダラが棲む自然環境では無いと思っていた。ところがアサギマダラ最盛期の天気の良い日には常時 200 頭を超すアサギマダラの乱舞状態が続き、改めてフジバカマの誘引力とアサギマダラの生息数の多さ、不思議さに驚いた次第である。

この谷を通過する一日に千頭ものアサギマダラは一体何処から来るのであろうか。標識した 1147 頭の中には遠い北の国で標識されたものが 10 頭含まれていた。一番遠くは山形県蔵

王温泉から 51 日間で 549km も飛んでやって来たものである。次いで栃木県日光、富山県黒部、石川県能登、長野県からは 4 頭もやって来た。

また、水尾で標識されたアサギマダラはほぼ南西に移動し、いま現在で 32 頭再捕獲されている。そのうち鹿児島県の離島では 3 頭(900km 以上)、その途中の高知県では 13 頭など遠距離移動が続出しており、恐らく風に乗って空路で移動しているのではないかと推察される。

アサギマダラはどうやってフジバカマに辿り着くのだろうか。網を振らずに離れて観察していると、殆どのアサギマダラが風下からやってくるのが分かった。多くの日が早朝は無風、陽が射すと一旦弱い南風になり、そののち北風というパターンだったが、飛来する数が増えるのは北風になってからである。アサギマダラは南(風下)からやって来て、一旦防獣ネットの前でためらい勝ちにホバリングをし、5~6 頭溜まったところで 1 頭がネットを越えると、残りもぞろぞろと続いて越えるのが観察された。

嗅覚も老化した私には、離れてフジバカマの香りを嗅ぐのは難しいが、人間の数万倍と言われる昆虫の嗅覚は鋭いのだろう。南下移動中のアサギマダラは高空を一旦通過し、水尾谷に煙のごとく拡散したフジバカマの香りを辿ってやって来るに違いないと思っている。そういった様子が目の前で手に取るように観察されるのが、水尾の凄いところだ。是非少年たちにも見せてやりたい。(2011.11.10 記)

